

木代修一関係文書の書簡資料 —「師友華牋」を中心に—

田中友香理

はじめに

木代修一先生の関係文書の存在を知ったとき、筆者はある感慨に打たれた。木代先生のお名前にはじめて接したのは、今から11年前に受講した中野目徹先生の日本史特講においてであった。テーマは「近代日本の知識人論」で、初回の授業で筑波大学の史学の歴史についてお話しくださり、三宅米吉先生のお弟子として木代修一先生のお名前を挙げられた。まさか自身が大学アーカイブズに所属している間に、先生の文書の受贈に立ち会えるとは夢にも思っていなかった。

本稿では、木代修一関係文書のうち書簡資料について紹介したいのだが、大変残念なことに、本年4月初旬段階で作業を完遂することが不可能になってしまった。国立国会図書館をはじめ各大学の附属図書館が新型コロナウイルス感染拡大防止のために閉館となり、本稿執筆に必要な調査を中断せざるを得ない状況に追い込まれたのである。具体的には、書簡発信者の経歴・学歴が記された資料（校友会等の名簿や記念論集、伝記等）や各資料館所蔵の関係文書にアクセスすることがかなわなくなった。急遽、個人所蔵の『茗溪会会員名簿』や学士会『会員氏名録』を借用するとともに、国立国会図書館のデジタルコレクションで公開されている各年度の『東京文科大学一覽』、京都大学大学図書館のホームページで公開されている教員履歴データベース（<https://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/rireki/>）や東京文化財研究所のホームページで公開されている美術関係の物故者記事データベース（<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/>）で情報を収集した。それらによって、多くの書簡発信者の経歴・学歴を明らかにしえたが、依然判然としない発信者も多い。したがって、本稿では書簡資料に対して計量的な分析を加えることを断念し、まずは書簡資料の全体像を提示し、その後、書簡発信者を4つに分類し、木代先生が発信者と知的交遊を結ばれていたという前提に立って、木代先生が所属した知的社会の特質について論じたい。なお、木代先生を含めて先生方のお名前について、本稿の性格を考え、以下、敬称を省略させていただく。

1. 書簡資料の全体像

筑波大学アーカイブズで受贈した木代修一関係文書のうち書簡の主なもの「師友華牋」全9巻に収録されている。「師友華牋」とは、生前の木代が自身宛の書簡（葉書と封書、書状）等をスクラップブックに糊付けして整理したものである（2020寄木5-198～206）。木代修一関係文書のなかにはそのほかにも、スクラップブック等に貼付されていない封書（木代修一宛浅海正三書簡、2020寄木6-207～212）や自伝稿「自紀史料」全3巻（2020寄木6-227～229）と日記「過眼日抄」全197冊（2020寄木1-1～4-197）に糊付けされた書簡がある。また後日、木代俊美氏よりお預かりしたファイルには葉書が収録されている。

木代修一関係文書の書簡資料全体の性格について述べると、ほぼすべてが木代受信書簡であり、一部俊美氏をはじめ御家族宛の書簡が認められる。さらに、全書簡のうち前出の浅海正二からの封書（6点）以外にはすべて木代による何かしらの整理が施されている。「師友華牋」収録書簡は、全1496点、スクラッ

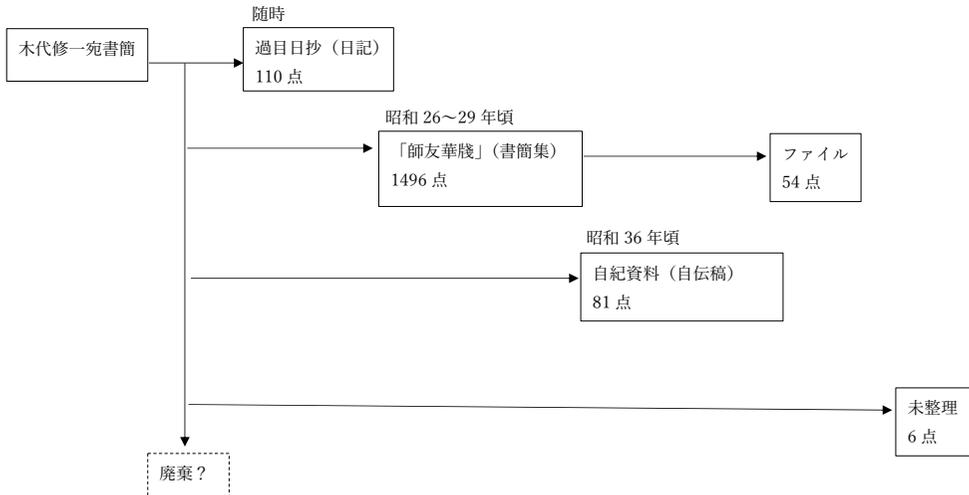


図1 木代修一関係文書の木代宛書簡資料の伝来

ピングの順番はおおむね受信日順であるが、前後する場合も見られ、必ずしも受信後すぐに貼付されたわけではなく、受信書簡数がある程度になった時点で整理、貼付したようである。「過目日抄」を見ると、その記述を補うために受信日後数日以内に糊付けされた書簡が110点確認できた。昭和36年の東京教育大学退官前後に執筆されたとみられる自伝稿「自紀資料」には、過去受信した書簡のうち記述に関係するものが81点貼付されている。後日お預かりのファイルに収録された書簡54点は、ほぼすべてに台紙から引き剥がされた形跡が見られ、いずれかの段階で木代が「師友華牋」から何かしらの意図をもって選別したものと思われる。そこから考えると、図1のように、木代が受信した書簡は、受信後、比較的早い段階で「過目日抄」に貼付され、そのほかのものはある時点で「師友華牋」か「自紀資料」に収録され、残りは未整理のまま保存もしくは廃棄されたと考えられよう。

2. 「師友華牋」について

以上のように点数から言っても、資料の成り立ちから言っても、「師友華牋」が木代修一関係文書のうち書簡資料の基幹であることは間違いない。以下、本節では「師友華牋」について論じる。「師友華牋」は、とじ込み式スクラップブックに書簡を貼付したもので、各巻の表紙には木代自身の筆によって「師友華牋」と記された題箋が付されている（写真1参照）。本来全10巻であったようだが、第7巻を除く9巻が当館に寄贈された。俊美氏によれば第7巻の所在は不明とのことである。それぞれの収録件数は第1巻が161点（内4点は書簡ではない）、第2巻が232点、第3巻が201点、第4巻が184点、第5巻が166点、第6巻が204点、第8巻が104点、第9巻が123点、第10巻が121点の計1496点で、おおむね1巻あたり



写真1 「師友華牋」全9巻表紙

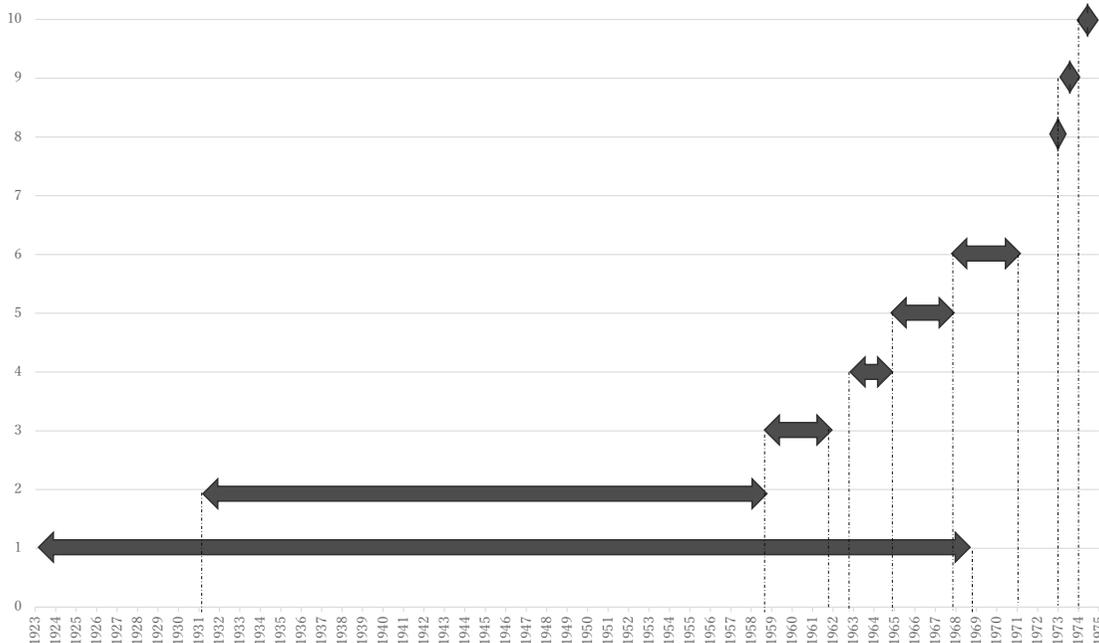


表1 「師友華牋」の各巻の収録年代

120~200点程度の書簡が貼付されている。

収録年代を見てみよう。各巻の収録年代をグラフ化すると表1のようになる。一見してわかるように、第3巻以降は1巻あたり1、2年の間に受信した書簡を時系列順に収録しているが、第1、2巻はかなり長い期間の受信書簡を収録している。第1、2巻の書簡収録のルールは、それぞれの目次を見ると判然とする(写真2参照)。年代ではなく人物順に整理、収録されたのである。第2巻の目次を見ると、最後の人名は「家永三郎」で、以下「昭和二十六・七・八年」「昭和二十九年」「昭和三十年」…と年代順になっている。以後第10巻にいたるまで時系列順に編纂されるため、

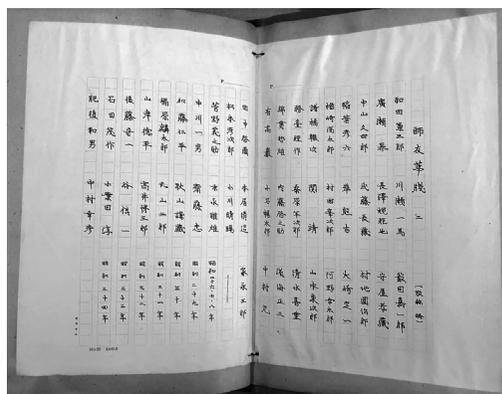


写真2 「師友華牋」第2巻の目次

「師友華牋」の編纂開始年代はおおよそ昭和26~9年頃ではないかと思われる。ちなみに、表1だけを見ると、第1巻が昭和44年(1969)まで万遍なく収録しているように見えるが、昭和28年作成のある書簡に関係する44年の書簡を1点挿入しているだけで、他は大正12年~昭和29年の書簡である。無論、昭和27年頃より後に編纂し、収録基準を昭和27年頃までとそれ以降で変えただけとも考えられるが、たとえば第2巻の目次にある務台理作や諸橋轍次の書簡は、第2巻だけでなく第3、7、8、9巻にもみられる。同じ人物からの書簡がある時点前後で異なる基準で収録しているのは、その時点で「師友華牋」を編纂しはじめたから、という以外の合理的な説明が見当たらない。さらにいうと、昭和27年3月31日に、木代が卒業以来長らく籍を置き続けた東京高等師範学校が閉校した。入学以来、学生として、教官として長らく同校に所属し続けた木代の回顧の念が、彼をして受信書簡の整理と「師友華牋」の編纂に向かわしめたのだと思われる。

次に、年代別の書簡数を見てみよう(表2参照)。昭和34~37年の書簡を収録している第3巻以後の巻

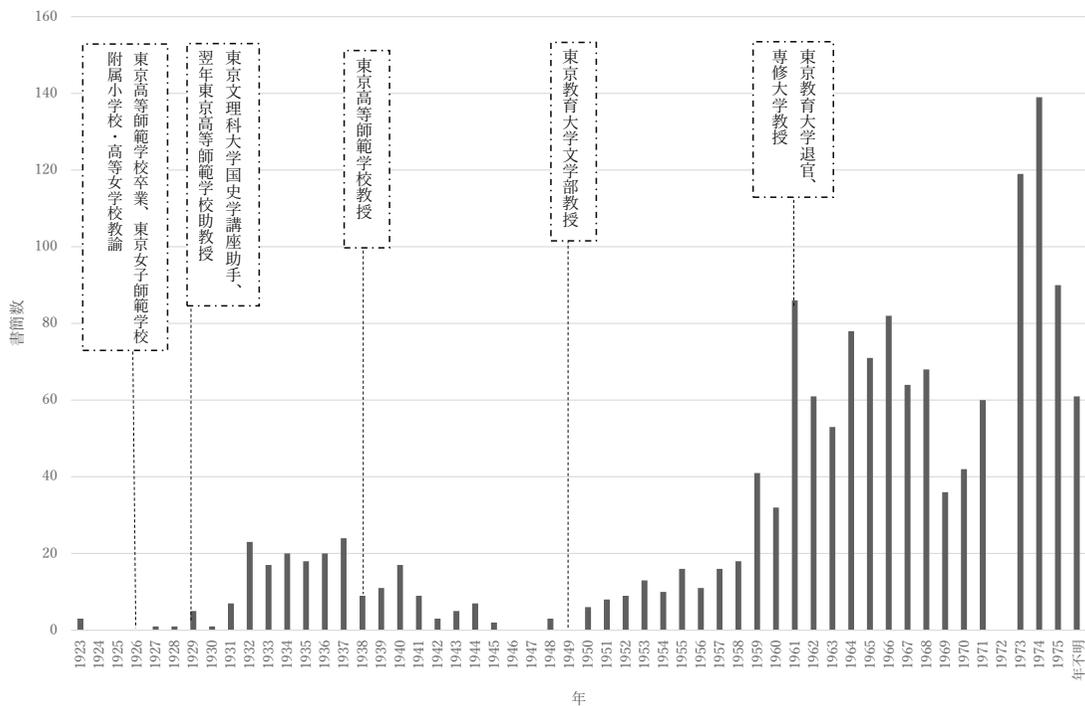


表2 「師友華牋」収録の書簡数（年別）

は、おおむね1～3年分の書簡を収録しているため、昭和34年以降の書簡数はそれ以前よりも多く、とくに東京教育大学退官後の書簡が多い（昭和47年受信の書簡は第7巻に収録されていたはずである）。それに比して昭和34年以前の件数は著しく少ない。

次節では、「師友華牋」に収録された書簡の発信者、つまり「師友」に着目し、その広がりをもつ4つの視点から明らかにしていきたい。とくに第1、2巻を中心として、そのような「師友」交際と木代の学者としての自己形成を関わせながら論じる。

3. 「師友」の広がり

①東京高等師範学校在学時の恩師

第一に、木代自身の出身校であり職場でもあった東京高等師範学校関係者、とくに恩師の書簡が多く収録されている。「師友華牋」第1巻の記念すべき1ページ目には、雑誌『文』第4巻第9号に掲載されたと思われる三宅米吉「扶桑国諸説」下の原稿が貼付されている（写真3参照）。以降、三宅米吉がサインをした「東京高等師範学校参考書貸与保証書」3点と電報「ミヤケセンセイキトクスグコイ」、そして三宅の死亡通知書が続く（2020寄木5-198-1～6）。大正11年（1922）4月、木代が東京高等師範学校文科第1部別組（歴史・地理専攻）に入学したとき、三宅はすでに63歳、国史の教授と校長を兼任していた。木代は三宅について後に「はじめどこが偉いのか一向わからなかった」（木代修一『ある歴史家の手帳』雄山閣出版、1967年）と述懐しているが、大正14年には木代が発起人のひとりとなった大塚史学会の会長に三宅が就任し、その後昭和4年に東京文理科大学が創設されると、三宅主宰の国史学教室の助手として木代が採用された。木代は、そのような師弟の交流をとおして、三宅の学問に対する「潔癖」な態度を敬慕するようになったという（同上『ある歴史家の手帳』）。

三宅以外にも木代が師事した当時の教官たちとして東洋史の中山久四郎、地理学の田中啓爾、辻村太郎、社会学の綿貫哲雄らの書簡も見られる。主に山岳の地形学を専門とした辻村からの助言はその後の木代の学者人生を考えるにあたって重要である。「我が国の学者はペンで自由に図を書くことに熟達して居」ないので、「地図特にスケッチマップに対する習練」が必要であること、さらに「良き意味に於けるアルピニズム」を持ち「鋭く観察し深く思索する登山者を欲」すことを木代に書き送っている（2020寄木5-198-161）。

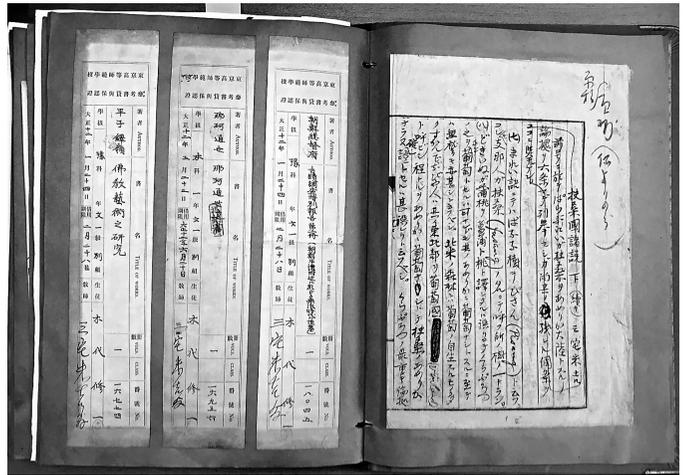


写真3 三宅米吉「扶桑国諸説」下、「東京高等師範学校参考書貸与保証書」

中野目稿で紹介された「過眼日抄」では、木代が生涯にわたって、全国各地の寺院、神社、博物館、遺跡等を訪れてはすべてを「鋭く観察」し、建造物から路傍の碑までを丹念に模写した様子が見える。辻村の東京帝国大学転任後に地理学の教授となった田中からは、昭和13年（1938）5月に木代が東京高等師範学校教授に任じられた際、「御昇進」「おめでたう」、「三宅先生も御満足」であろう、「今後の大成を祈る」との祝辞が贈られている（2020寄木5-199-22）。東京高等師範学校出身の田中にとって、生え抜きの若手の教授就任は特別な重みをもつものであった。

また、三宅急逝後、東京文科大学国史学教室の教授に就任した松本彦次郎からの書簡も「師友華牋」に収められている。そのうち主なものは後に西山松之助編『松本彦次郎書簡集』（「松本彦次郎書簡集」刊行会、1977年）に翻刻、収録された。昭和7年から30年までの17点の書簡からは、両者の親しい交際の様子がうかがえる。そのうち、『書簡集』に収録されていない書簡を紹介しよう。松本は逝去する3年前、昭和30年11月7日付封書で、「大兄の学位論文も是非御完成のこと切に御すすめ申し上げます」と、当時東京教育大学教授と桐朋女子学園小学校幼稚園園長等を兼任していた木代に、自身の研究を大切にしようさり気ない忠告を発している（2020寄木5-199-170）。それから7年後、昭和37年に木代は「平城京の都市生活についての研究」で博士号を取得した。

② 学者社会への参入

木代は東京高等師範学校在学中に大塚史学会の発起人になると同時に大塚地理学会の委員にも選出され、大正14年（1925）、考古学会学生幹事に推薦された。三宅が創始した考古学会において、木代は、東京帝室博物館の高橋健自や高橋に師事した石田茂作ら東京高等師範学校出身の先輩と交流をもった（2020寄木5-198-8、199-56等）。こうして木代は、草創期の考古学界を中心とする学者社会へと足を踏み入れていくわけだが、それには考古学会編『考古学雑誌』や歴史教育研究会（中山久四郎主幹）編『歴史教育』、大塚史学会編『史潮』の編集をはじめとする学会事務の担当が幾分か寄与した。たとえば、東京帝国大学史料編纂所の西岡虎之助からは『史潮』寄稿依頼への返信が、白鳥庫吉や東洋文庫主任の石田幹之助、朝鮮総督府博物館の斎藤忠からは講演依頼への返信が木代宛に届いている（2020寄木5-198-150、11、128、144）。

学者として当然であるとはいえ、木代は研究論文の発表によって、学者社会における自身の地歩を固

めていった。「師友華牋」第1、2巻の多くを占めるのは、抜刷送付への礼状である。たとえば、歴史教育研究会編『明治以後に於ける歴史学の発達』（四海書房、1932年）に寄稿した「明治以後に於ける歴史学の発達 美術史」の抜刷に対しては、昭和7年12月以降に、京都帝国大学の考古学の泰斗である浜田青陵、梅原末治、仏教美術史の源豊宗、東京帝国大学で建築史を専門とした関野貞、東京帝国大学史料編纂所所長で日本仏教史の辻善之助から礼状が届いている（写真4参照、

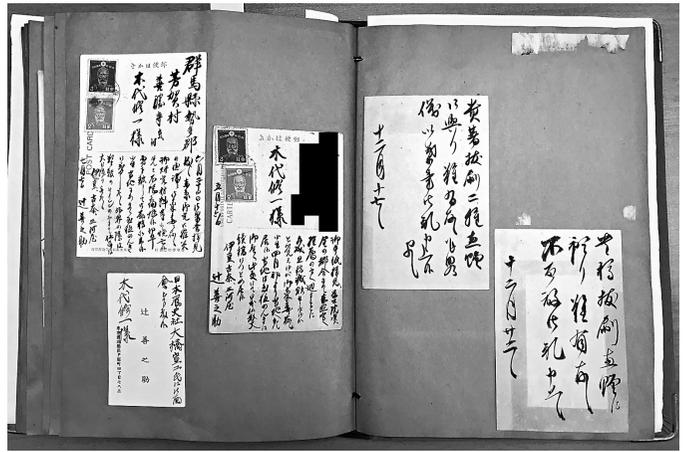


写真4 昭和7年12月17日付木代修一宛辻善之助書簡ほか

2020寄木5-198-14、94、88、12、30)。ちなみに『明治以後に於ける歴史学の発達』は、松本彦次郎、中山久二郎、有高巖をはじめとする東京文理科大学の教官やその関係者が中心となって、明治期以後の歴史学について、文化史、思想史、経済史、政治史、法制史等といった項目ごとにその変遷を分析したものであり、木代は美術史を担当した。東京帝国大学の国史学に対して、文化史や思想史を中心とする茗溪の歴史学が開花しつつあるなか、木代もまたその一端を担った。すでに「平城京都市生活の一考察」（『史潮』第1年第3号、1931年）、「奈良朝における写経生の生活」（『歴史教育』第7巻第6・7号、1932年）を発表し、考古学的知見をもとに、古代日本の生活文化史を専門としていたが、次第に、美術史をも包含する文化史へと専門を広げていったのである。そのような木代の業績に対して、浜田の弟子のひとりであり、木代の1歳年長の末永雅雄からは、昭和11年4月15日付で「各種の御研究方法に就きても常に多大なる貴兄に対する尊敬を有し居候」との所感が寄せられた（2020寄木5-198-139）。他の論文に対しても、中村孝也や竹内理三、相田二郎、荻野三七彦等からの礼状が届いている（2020寄木5-198-134、158、123、152）。ただし、当時すでに文化史の大家であった京都帝国大学教授の西田直二郎からの書簡は収録されていない。

以上のように考古学から文化史へと次第に専門を広げ、学者社会においても一定の認識を得られたことは木代を大いに勇気づけたと思われるが、彼の研究への動機付けをさらに強めたのは、優秀な同窓生や若手研究者らとの交流であった。三宅の研究室で副手を務め、32歳の若さで急逝するも、松本清張『断碑』主人公のモデルとなった異色の考古学者、森本六爾からは昭和9年（1934）に「文献史学、民俗学、考古学、人類学、地理学、社会経済史学等の若い時代の何等かの結合」のための組織の立ち上げへの協力を依頼され（2020寄木5-198-112）、京都帝国大学大学院に進学した肥後和男からは昭和6年12月に「将来の大成を期する為」に、「特に歴史の三方法たる文献と考古と民俗」を修め、その上に「自分の歴史学を建設したい」との大望を明かされている（写真5参照、2020寄木5-199-61）。ほかにも同期の志賀剛から19点、大高常彦から143点、そして明治憲法制定史の研究で著名な稲田正次から3点の書簡が寄せられている（ただし彼らからの書簡は昭和30年代以降のものが大半である）。若手研究者の不安と気負いは今も昔も変わらないと思われるが、「師友華牋」からは、同志でありライバルでもあった彼らの交際の様子が浮かび上がってくるのである。

③文化人社会との接点

文化史研究の特殊性は、研究者自身もまた芸事への深い造詣を要求されるという点に求められるであ

ろう。木代もまた描画の才にあふれていたことが「過眼日抄」や水彩画のスケッチブック「画帖」等からうかがえる（2020寄木6-244）。「師友華牋」からは、文化史研究者として、学者だけでなく文化人とも交流を深める木代の姿が見てとれる。たとえば、中野目稿でも指摘された柳宗悦からの葉書が1点貼付されている（写真6参照、2020寄木5-198-62）。また、偶然奈良で出会ったという会津八一からの書簡も10点取められ、そのうちの1点はすでに前掲『ある歴史家の手帳』で翻刻、紹介されているが、他にも、これから「卒業論文」の「点検」に入るが、今度お会いしての「高話拝聴」が楽しみであるという旨をしたためてきた葉書や、揮毫の依頼を断る葉書等がみられる（2020寄木5-198-44、199-151）。さらに、佐佐木信綱からは「お申し越しの書」を「蔵」より出しておく旨来信があった（2020寄木5-198-27）。このような史料調査を介した交流は、本居宣長やその弟子たち、そして村田清風の子孫とも結ばれたようである（2020寄木5-199-100、93等）。ほかに、画家の中村一良や金沢の四校記念碑で知られる彫刻家の吉田三郎からは抜刷送付の礼状が届けられている（2020寄木5-199-223、198-159）。会津とも親交の深かった写真家の小川晴暘からは、昭和14年7月に陸軍従軍写真家として大陸に赴く旨が報告されている（2020寄木5-199-101）。また、肥後和男が、はじめて北大路魯山人と面語した時の様子を伝えてきた書簡は実に面白い。「会ってみると誠に驚くべき人物だといふ感じがしました。今は主として製陶をやっていますがその豊かな天分とすばらしい力倆とはその作品をして当代無双のものたらしめておます。」「食器に関したものではありません。他の追隨を許さないものがあります。」「この人は絵もすばらしいし書道に於いても絶大の自信をもっています。とにかく当代第一流の天分をもった人間です。」「当代一流の天分」をもつ人間に出会った肥後の興奮が行間からにじみ出ている（2020寄木5-199-64）。肥後は、その感動を共有できる相手として木代を真っ先に思い浮かべたのであろう。

ここで着目するのは木代と土田杏村との関係である。前掲『ある歴史家の手帳』によれば、木代は「文明批評家」としての杏村よりも、桃山時代の障壁画の研究者としての杏村に興味をひかれたようで、最晩年の杏村の自宅を訪問した折も、障壁画について議論し

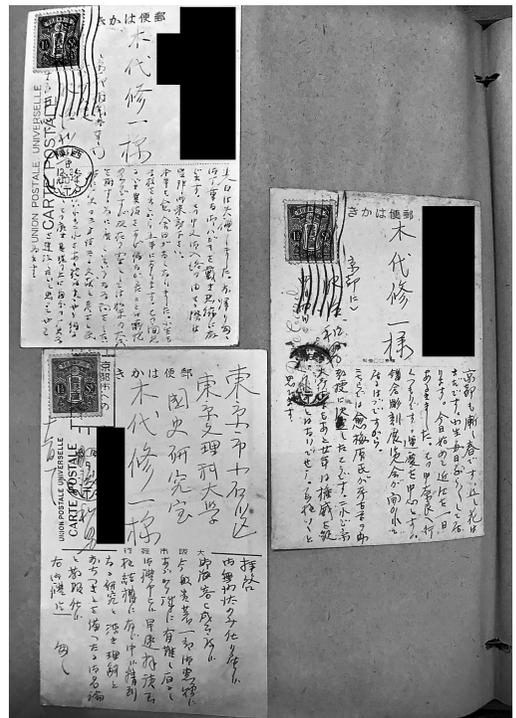


写真5 昭和6年12月24日付木代修一宛肥後和男書簡ほか

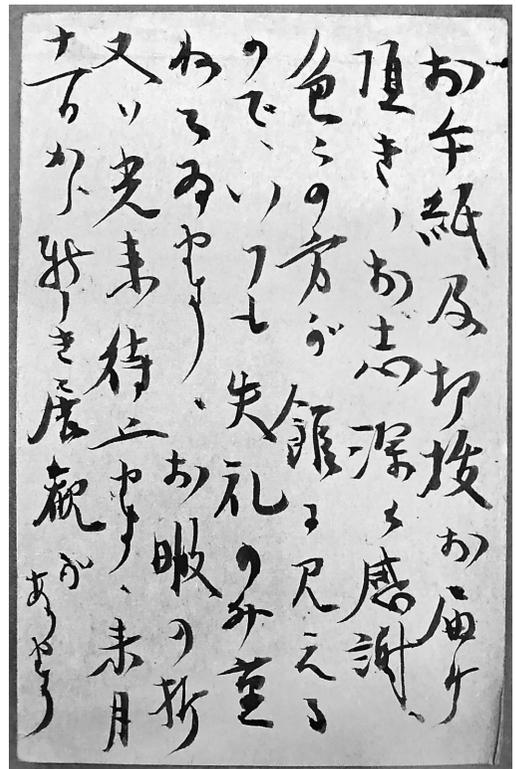
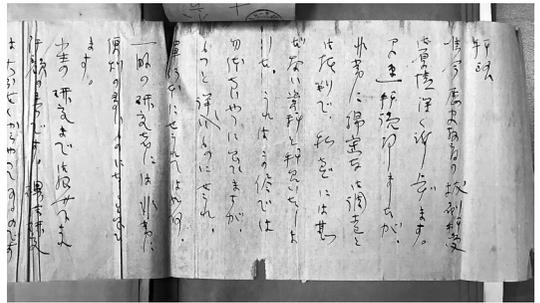
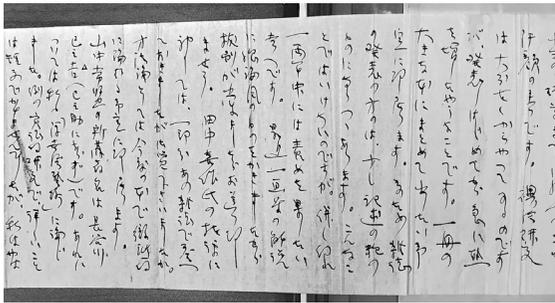


写真6 昭和12年4月29日木代修一宛柳宗悦書簡



たという。杏村は木代の7歳年長、すでに文壇における地位を確立していたが、その書簡はいずれも丁寧でぬくもりのある書きぶりである。昭和7年に『歴史教育』に発表した「奈良朝における写経生の生活」の抜刷に対しては、「非常に綿密な御調査と御批判」がなされていると称賛し、単行本化を勧めたうえで、以下のように締めくくっている。「高師の方は美術史研究なかなか盛んなやうですが、御研究次々発表くださる一般の蒙を啓してほしいと囑望に堪へません」と（写真7参照、2020寄木5-198-76）。東京高等師範学校の卒業生であった土田にとって、後輩であるとともに母校の教官であった木代の「美術史研究」には特別な思い入れがあったのであろう。杏村は昭和9年4月に逝去するが、「師友華牋」にはそのひと月前の書簡が収録されている。同月に発行されたばかりの『日本文化史図録』（四海書房）に対して「資料の精確選択にそつがなく堂々たる大著」であるとひとしきりほめそやしている（2020寄木5-198-79）。杏村没後には夫人から、杏村は「主人生前よりあなたさまの御論文に敬服して拝読」していたとの思い出が寄せられた（2020寄木5-198-78）。

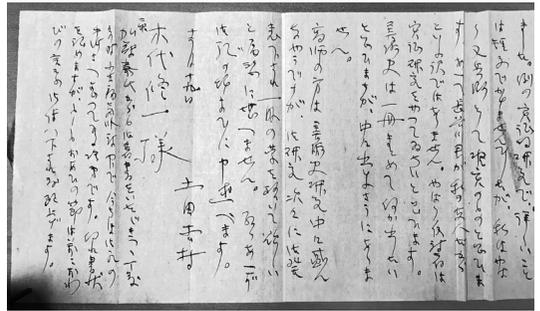


写真7 昭和7年12月19日付木代修一宛土田杏村書簡

以上のように、柳に会津、土田ら文化人の手簡は、「師友華牋」をさらに薫り高いものにしていといえよう。それらの書簡は、木代が学者社会の内部に籠城するのではなく、文化人社会と学者社会の両円の重なる地点にいたことを物語っている。そうした幅広く、かつ良質な交際は、木代の知識人社会の研究に少なからず影響を与えたことと思われる。

④東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学という場

木代は、学者社会と文化人社会の双方に属していたが、恩師たちや杏村、肥後らとの交流からもわかるとおり、個人としてそれらの社会を浮遊していたわけではなく、東京高等師範学校、東京文理科大学、そして東京教育大学という場を縁とした縦と横の人間関係を基軸としていた点において終生変わらなかった。東京高等師範学校と東京文理科大学、そして戦後の東京教育大学すべての教官を務めた木代は、それを意識的に維持していたように思われる。「師友華牋」の第2巻は主に東京文理科大学、東京教育大学文学部の同僚をはじめとする関係者の書簡で構成されている。

第2巻には、文学の研究者として、『大漢和辞典』を編纂した諸橋轍次、書誌学の大家で後に成篁堂文庫の調査に携わる川瀬一馬、哲学では務台理作、社会学では綿貫哲雄、有賀喜左衛門、東洋史学の有高巖、中山久四郎、英文学の福原麟太郎らそうそうたる学者からの書簡が収録されている（2020寄木5-199-13、71、14、15、229、20、46等）。

「師友華牋」からは、上記のような学問の垣根を越えて同僚らと知的交遊を続けるなか、足元の日本史学専攻において、東京教育大学の設置を経てなお高等師範以来の日本史学の伝統を絶やさぬよう努力する木代の姿が浮かび上がってくる。東京教育大学設置後の家永三郎の書簡に着目しよう。年不明ではあるが、「この度新大学移行発令祝着」等との文言から昭和24年(1949)と推定できる書簡では、「日本史の助教授の件」はしばらく静観するが、「御推薦の直江君」について「この問題には種々難関がある」のではないかという(写真8参照、2020寄木5-199-137)。「直江君」つまり、直江広治(東京文理科大学卒業)は、この後、昭和27年に木代が設けた史学方法論教室の助教授に任じられた。昭和26年11月27日付書簡では、「和歌森君が拙宅へ来訪されて要談された件があり、そのほか重要な人事に関する件」があるため、「一度木代先生にも私宅に来駕」を願うとした(2020寄木5-199-133)。翌年8月21日付書簡で「津田君の件」を「設置審議会の専門委員」に諮ったことと、大阪学芸大学から転任同意の返信が来たことが明かされている(2020寄木5-199-140)。つまり東京文理科大学卒の津田秀夫を日本史学教室の講師として採用した際の人事に関するものである。「師友華牋」には、教授会等に関する家永の書簡が18点収録されているが、それらからは東京教育大学草創期の日本史専攻の人事への木代の関与がうかがえる。さらに、東京高等師範学校系統と東京文理科大学系統が合流したことによる人事の難しさもあったようで、年不明4月6日付家永書簡によると、「代議員会」において「東洋史公認詮衡委員会開催」が決定されつつあり、家永は東洋史の助教授として中島敏(東京高等師範学校教授)案を支持したのに対して、小竹文夫(東京文理科大学教授)案が浮上してきたので、「この際文理大と正面衝突を覚悟」し、「最悪の場合は評議会で決選投票の事態に迫られるかもしれません」という(2020寄木5-199-136)。作成年を昭和24年と推定すると、このときは家永が推した中島案が採択されたようである。日本史学教室もまた、高等師範学校からは木代、家永、西山松之助が、東京文理科大学から和歌森太郎、芳賀幸四郎、桜井徳太郎、竹田且が、農業教育専門から川副博が、体育専門から中田易直が配置された(遅れて津田)。無論、この辺りの事情を知るには、木代修一関係文書以外の史料をいくつも組み合わせるほかない。ともあれ、「師友華牋」には、家永のほかは西山から16点、芳賀から1点、和歌森から1点、熊倉功夫から1点、川副から2点の書簡が見られる。村岡典嗣(東京文理科大学で松本と並んで国史講座を受け持つ)、桜井、竹田、中田、直江、津田、昭和35年に助教授として採用された大江志乃夫からの書簡は1点も収録されていない。

最後に、木代の教え子からの便りを見てみよう。東京高等師範学校、東京文理科大学を卒業した中田祝夫から、「拙著」(『古点本の国語学的研究』か)への木代のコメントに対する礼状が昭和29年10月11日付で届いた(2020寄木5-199-153)。「かつて先生には高等師範文二の一年生として国史の御指導を拝聴いたしました。まだこのときの覚書を大切にしております。あの頃の御薫陶が拙ながらますます今回の著をなす下地をなしておるものであります。」また、以前筆者は、昭和26年に東京高等師範学校

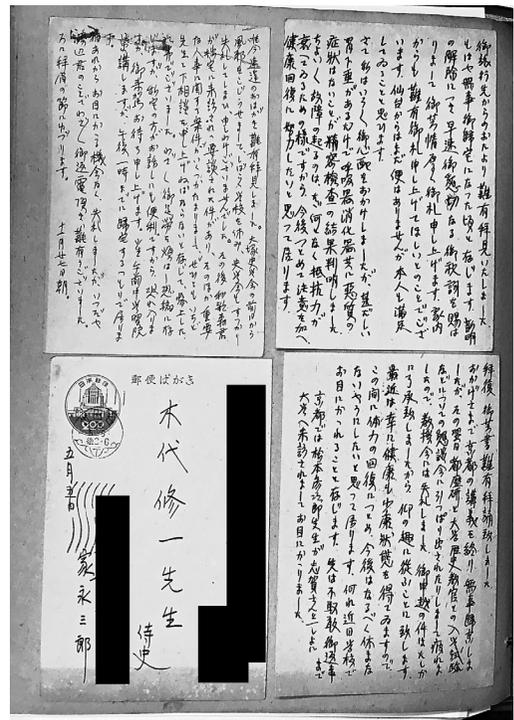


写真8 昭和24年か8月16日付木代修一宛家永三郎書簡ほか

を卒業した倉木常夫からも、木代は非常に温厚な教師であったとの証言を得たことがある。中田はすでに昭和24年、東京教育大学国語学国文学教室の助教授として採用されており、その後筑波大学にも赴任した。

木代は生涯にわたって研究を中心とする生活を維持し、他大学の著名な学者と交流するなかにあっても、決して教育をおろそかにせず、教える、教わる、で連綿と続いてきた東京高等師範学校以来の伝統を人的にも、学問的にも絶やすことなく繋いだのである。

おわりに

以上、本稿では、木代修一関係文書の書簡資料のうち、とくに「師友華牋」全9巻について、その発信者の特徴を4つに分け、それらから木代を取り巻く知的社会がいかなるものであったのかを論じた。「師友華牋」からは、東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学における縦と横の人脈を維持しながら、学者社会と文化人社会への参入を通して、学問を継受、発展させ、さらに引き継いでいった木代の生涯が浮かび上がってきた。その間の木代の「内面の省察」については、中野目稿で紹介された「過眼日抄」を繙くことで明らかになろう。

最後に史料学的見地から「師友華牋」について一言する。同資料は、書簡資料であることに違いないが、史料として利用する際は、あくまで木代自身の選別・整理を経たものであることに留意しなくてはならない。9巻ともすべて同じ種類のスクラップブックで、それぞれ目次まで付されており、さらには各ページに手書きの人名見出しまで記されている場合がある。近代以降において、本人によってこれほど整理された書簡資料というものを筆者は見たことがない。いずれの書簡も手が美しく、さらに見開きで見たときに1枚の絵として美しく感じられるように書簡が配置されている。近代以前の文化人の歌帖等を意識したのであろうか。本稿冒頭で掲げた表1、2からも明らかなおと、東京教育大学退官までの書簡はそれ以後と比較してかなり少ないのも気にかかる。「師友華牋」作成時に、木代が意図的に廃棄された書簡もあるのではなかろうか。

いずれにしても、「師友華牋」は史料としての価値だけでなく、美術的価値をも有す稀少な書簡集であることに相違なく、より多くの方に公開できる日を楽しみにしている。